

福知山線脱線事故から12年



4月25日、福知山線脱線事故（死者107名、負傷者562名）から12年が経ちました。この事故は、数分の遅れを取り戻そうと無理な運転をしたこと等が背後原因とされていますが、なぜ「安全」に運転する事が最優先されなかったのか、その本質は事象を起こした社員に対する見せしめ的な「日勤教育」にあったと言われています。日勤教育は教育ではなく「懲罰」のようなもので、乗務員は「降ろされるかもしれない・・・」と精神的に追い詰められるケースが相次ぎ、自殺や鬱に追い込まれることもありました。

事象に対して原因究明ではなく過度な「責任追及」に走れば、結果的に安全が守られなくなることは言うまでもありません。この事故の教訓を今一度認識して鉄道の「安全」を私達から守っていきましょう！

日勤教育とは

事象と関係ない就業規則や経営理念の書き写しや作文・レポートの作成、草むしりやトイレ清掃、時には管理者が集団で毎日のように桐喝や罵声を浴びせ続けて「見せしめ」「晒し者」にする事もあり、精神的プレッシャーを増大させる温床となっていた。また、福知山線脱線事故の半年前には国会において国会議員が日勤教育について「重大事故を起こしかねない」として追及していた。